

# 母校の発展に寄与せん

石桜同窓会長

赤坂俊夫

母校岩手中・高校の創立記念日は大正一五年二月一日であるから、平成七年の二月で七〇周年となる。津田の学農社を巢立つた創立者の三田義正翁は樹齡三〇〇年を越す校ごとき植物が周囲二一メートル、高さ一、七メートルもある巨岩を割るようにして生えてきた石割り桜を見て、その苦難に打ち克つて花を咲かせる生き様に人間育成を思い立ち、燃えに燃えて吉田松陰の松下村塾が脳裏を走り、官公立学校のあるなかで恐らく石桜塾なるものに夢を託して創立したのが岩手中学校であったと思う。

明治維新のように、わが国特有の皇室と国

民の繁栄を願いながら、朝日のような輝きと正しい道を歩む人間を造るために、校規の三大綱領に「積慶・重暉・養正」を校訓としたその理想には全く敬服の他はない。

大沢川原もとをおく、わが中学の同じ窓、希望の光身に浴びて、心ひとしくすこやかに、高き遠きにあこがれる。これは土井晩翠作詞の校歌であるが、とくに高き遠きにあこがれるの一節のように長い歴史の中で幾多の優秀な人材が育ち、社会で活躍している。

しかし端的に物を申せば、現在この綱領が果たして持続しどの位生かされているだろうか。勉学、スポーツなどで次第に他の高校に

追い抜かれているのではないかという焦燥感にかられることもある。教職員が必死になって教鞭をとっている。しかしその効果をいかに發揮させるかが今後の問題となっていると思う。

同窓会とは会則にもあるように親睦、交誼は当然ながら、ますます緊密な同窓生の接点を模索せねばならないし、最も重要なことは同窓生が母校の発展にいかにか寄与するかということだと思う。更にその方法を検討し、編み出すことが今後の大きな課題と思われる。母校の発展と同時に、優秀な人材が世に出て活躍することにより、同窓生同士が社会において肩身が広くなり、母校と同窓生の一体感が生まれてくるのが当然である。

最後に活躍されてこられた松見得明前会長と、会長を熱く支援されてこられた役員の方々、心からその労を謝し、今後とも変わらぬ大きなアドバイスを戴き、その功績を汚さぬように精進することを誓いたいと思う。